

エスペラント国旅紀行

第93回ロッテルダム世界大会

(Rakonto de vojaĝo al Esperantujo – 93-a UK en Roterdamo)

佐々木照央

U E A本部お膝元

2008年7月19日から26日、第93回エスペラント世界大会がオランダ、ロッテルダムで行われた。中一日の休みがあるので実質一週間、年一度のエスペラント国が出現した。大会テーマは「諸言語は人類の宝」であった。1955年から世界エスペラント協会（U E A）本部がこの都市の小さな建物で仕事をしている。今回の世界大会は本家本元での開催である。

その意味で、今回の世界大会はU E Aが標準とする形式であるはずだ。この標準を満たせばU E Aとしては成功とみなす、標準以下であれば不成功とみなす。なにしろU E A直々に開催された大会である。先走って言えば、去年の横浜大会は標準をはるかに越えた大成功ということになる。

最も大事な大会会場であるが、貿易センター（Beurs-WTC）の二階（現地の換算では一階？）の広い空間を仕切ったような部屋に設置された。主会場は870名位しか入場できない。参加者は1800名程度だから、半数以上は入れない。開会式、閉会式、各種コンサートなどでは入場できない参加者たちは別の場所でテレビを見ることとなった。世界大会というと、諸外国から高い旅費を払って来るのである。参加費もただではない。またロッテルダムの物価は驚くほど高い。そのため韓国人で参加を断念した人も多いと聞いた。参加費を取っていないながら半数以上が入場できない、これが今回のU E Aの標準なのである。

横浜では大会場が式典のために別に準備され、全員が入場できたから、U E A基準をはるかに越えている。今回、ある音楽コンサートの時には立ち見の客までできたが、これは火災予防の法律違反ということとあいなった。今後も世界大会が多くの都市で開催されるが、大きな会場がなくても今回のU E A本部方式によれば開催可能である。その意味で今後の開催地にとって負担軽減の手本となるであろう。マイクが技術上の理由で時々うまく機能しない事態が生じて、分科会でも支障が起こり、音楽コンサートでも30分以上開始が遅れるような不具合があった。出演者は困惑し、観客にもイライラが起こった。このような技術的問題は発生するのは事故だからいたし方ないとしても修理を即刻できるようなスタッフを用意しておく必要がある。しかしこんな技術的事故もU E Aのお膝元だから何の問題もなく標準である。

分科会の諸会場はまあまあ我慢できる程度であった。ただし、画家ゴッホについての講演では、用意された部屋では狭すぎて大会場に急遽変更された。ゴッホ伝講演は素晴らしいもので、講演者カタリン・コヴァチ女史他スタッフのエスペラント語の美しさを堪能できた。こういう講演にめぐり合えるなら、はるばるオランダまで来たかいがあるというもの。

世界大会の醍醐味の一つは、素晴らしいエスペランティストの話を直に聞ける、ということである。ハンフリー・トンキン氏、レナート・コルセッティ氏、ドイツのデトレフ・ブランケ氏、英国のジョン・ウェルズ氏、ダシグプタ会長その他、エスペラント熟達者の話はとても耳に心地好い。このような熟練者たちは世界大会の花、我々はその花見にはせ参じたともいえる。期待にたがわずトンキン氏はあらゆる場面で人々を魅了した。このようなエスペランティストに成りたい、と思う。とても不可能だが。開会式での各演説は素晴らしいものであった。ザメンホフの孫、ザレツキイ・ザメンホフ氏の演説、ハンフリー・トンキン氏の演説などは教材として使える立派な内容のものだった。またエスペラントに特に力を入れている都市ヘルツブルグ代表の演説も、これから日本の諸都市でエスペラント教育を進めたいと思う人々にはとても参考になるであろう。例えば、産炭地振興でリゾート地や遊園地を作り倒産するより、特別な外国語教

育実施で名を上げる方が観光客誘致にはるかに役だつ。国際言語年と世界大会によせたユネスコ代表の祝辞は松浦という日本人の名前で読み上げられた。こんな所で日本人が貢献しているのか、と感慨無量だった。

エスペラント語教育分科会

私は7月22日の「学校の日 *Tago de lernejo*」分科会で日本の大学でのエスペラント語教育について報告した。この分科会では他に、ポズナニのアダムミツケーヴィチ大学での教育、ハンフリー・トンキン、レナート・コルセッティの報告、などエスペラント教育について興味深い報告がならんでいた。私の埼玉大学と東京大学での教育実践についての報告は、すでに『ポンテート』に日本語で書いたものをエスペラント訳したものである。司会者からは後で、「とてもいい報告をありがとう」と感謝された。しかし、僕自身は恥ずかしさでいっぱいだった。理由は、私の教育実践がゲリラ的なもので、日本の制度の中でエスペラント語教育が正式に位置付けられていない、ことによる。

トンキン氏が制度の中に位置付けることの重要性について報告したあと、僕が制度の無い所での教育を語る、という状況であったこともその恥ずかしさの原因である。トンキン氏によれば、彼がブルガリアのエスペラント教育の参観に行った時の経験から、人間の個人的努力のみに依拠したならば、その個人が去った時に経験も方法も継承されない、しっかりした制度の確立こそエスペラント教育の発展にとって重要である、という趣旨の報告をした。トンキン氏はアムステルダム大学での教育者会議を主催した人物であるが、その会議も制度の確立と交流を目的としたものであった。

僕の前に報告したアダムミツケーヴィチ大学でのエスペラント語教育は極めて精緻に体系化されたものであり、エスペラント語を言語学の一環として位置付けるのみならず、社会科学、歴史その他にも関連付けて教育するこの十年間の経験が語られた。そこには日本人を含む数多くの留学生も受け容れられている、という。是非、その日本人から経験を拝聴したいものだ。また欧州の幾つかの大学、例えば、アムステルダム大学、フンボルト大学、ライプツィヒ大学などでは、国際言語学(*Interlingvistika*)というジャンルの下でエスペラント語が教えられている、という現状が報告されている。エスペラント語教育をどのような体系の下で制度化するか、これが欧米の現状の実践課題である。わが埼玉大学のように、「ロシア史、ロシア文学、東欧の文化、ゲルマン文化、欧米文化入門」などの看板で、エスペラントをゲリラ的に教えるのとは訳がちがう。僕らのやり方はまさに、個人的な努力であって、僕らがいなくなれば消えてしまう。トンキン氏の言うとおりである。我々も何とか後継者が生まれるようにと、若手研究者たちを養成するつもりではいるが、それも個人的なつながりを利用してである。

今回のオランダでの会議で痛感したことは、教育条件での彼我の相違があまりに大きいために教育経験の意見交換が成り立たない、ということである。僕は専ら聞き役にとどまるしかなかった。僕のエスペラント語運用能力にも問題があったのであるが。しかし、日本で今何ができるか？制度の無い現在の状況では、大学関係者のエスペラントリストが自分の出来る範囲で教育現場を作っていくしかあるまい。僕の方法は、まさに原始的な段階である。欧米のように言語学の一環として教えるようになるためには、言語学者を育成する機関でエスペラント語を設置するか、個人的に言語学者の友人達にエスペラント語を普及するしかない。田中克彦氏の業績はその意味で大きい。今回のオランダでも「田中克彦を知っているか」と良く質問された。彼は僕の兄弟子で古くからの付き合いだ、と答えておいた。

僕の教育実践の報告は、後から司会者にお褒めの言葉をもらったとはいうものの、会議の席上では散々な反響であった。質疑応答も大したものはず、聴衆も他の講演者に比べて少なかった。ドイヒロカズ夫妻が聞いてくれたのはせめてもの救いであった。まだまだ、日本と欧米のエスペラント語教育について共

通の土俵に立つ時代は来ていない、という印象を私は持った。いつか、日本の教育機関でエスペラント語が制度として位置付けられる時代が来るかどうか、それも定かではない。

ただ、今の日本はエスペラント語の普及にとって好機である。なぜなら、英語以外の第二外国語の危機的状況、英語自体の教育の行き詰まり、小学校への早期英語教育の導入という悲しい現状は、語学教育にエスペラント語を導入することによって外国語教育の蘇生をはかるチャンスでもある。埼玉大学の学生たちのエスペラント語への感想を見ると、この学習が外国語学習への興味を復活させてくれた、という声が多い。受験英語という日本の特殊状況が語学の喜びを減殺しているのである。日本の大学の教育学部で、英語教育の先生を育成するのと並行してエスペラント語を教えるようになればいいと心から思う。中国で蔡元培が提案したようにである。そのような制度が整っていかなくとも教育学部学生は言語教育、国語教育、英語教育の一環としてエスペラント文法の基礎知識ぐらいは備えておく必要がある。日本全国の教育系大学に関係しているエスペランティスト達の努力を期待したい。

恥辱は学問のはじめ

教育に関する僕の報告は欧米の状況から見たら遅れた条件の下での教育についてであり、僕としては「恥辱」の体験であった。しかし、恥をかくことが大切である。世界大会参加で実質的な成果を得るにはまず自分を赤子のような素朴さにもどして、どんな恥をかこうとも勇気をもって話す。どんなに稚拙でも一生懸命に話す。僕はもう 62 歳であるが、小学生のような気持ちで皆に接近していこうと思った。なかなか難しかったが、僕は報告者の一人であったためか、ある特別の会合に招かれ、世界大会の指導的人々と酒を飲むこととなった。僕が人々との話の輪の中に入るのをためらっていると、英国のジョン氏が、「こんな場所では手当たり次第勇敢に話し掛けなくちゃだめだ」と僕を強引に輪の中に連れ込んだ。相手の迷惑を考えてしまいがちだが、話し掛ける勇気こそ世界の間では重要なのである。

アムステルダム大学の会議（7月 17-18 日）でも会議の席上で討論に参加できるほどの語学力、勇気は僕には無かった。しかしながら、「遠く日本から来られた方の深い知恵をお聞きたい」などと挑発され、全く場違いな愚かな発言をしてしまうこともあった。赤っ恥のかきどおし、というのが今回のオランダ体験である。

ただ、アムステルダム大学の会議ではあらかじめ報告原稿を提出しておいたので、皆それを読んでくれていた。題目は「オネーギンの世界語訳について」で、『ポンテート』に載せたものをエスペラント語で加筆したものである。これは欧米のいろんな出席者から絶賛された。特にデトレフ・ブランケ氏からは特別に高い評価を受けた。気づきにくい細かで微妙な問題をよくとらえたと、誉められた。討論の現場では恥ばかりかいていた私も、この評価にほっとした。少しでも招待してくれたトンキン氏の顔がたった、と思う。この評価がなかったら、「なんであんなでくのぼーを日本から呼んだ」、と組織者は批判されたことだろう。

アジアの大切さ

今回、KAEM日本代表としてその会議と活動に参加した。アジア諸国の代表者たちと初めて顔を合わせ、会話した。世界のエスペラント運動においてアジアが占める重要な位置を改めて私は認識した。今、エスペラントの重要拠点は、欧州、ロシア、北米、中南米、そしてアジアである。それぞれの地域が、その地域の特性に応じて運動を展開している。中南米の人々は自分たちの言語がエスペラントと酷似しているが故に軽々と習得していく。ロシアはスターリンの弾圧から立ち直り再びエスペラント普及の波が生まれている。もともと印欧語諸国民にとってエスペラントは学習し易い言語であり、良い機会さえ生まれ

ば、直ちに燎原の火の如くに広がっていく。

多くのアジア諸国民にとってエスペラント語は貴重な共通語としての機能を発揮する。インド、ネパール、ヴェトナム、韓国、中国の人々と一つの言語で交流するとすれば、英語かエスペラント語である。残念ながら、多くの日本人は英語の聴き取りが苦手、そして話すのも発音が苦手であるから、エスペラント語でならその交流がもっと深まる可能性が高い。今回、KAEMのみやげ物販売コーナーでアジア諸国の代表者たちと座って会話することができた。欧米人ほど流暢ではないが、中国、韓国、ヴェトナム、ネパールの人々とエスペラントで「商売」に従事することは珍しい快樂であった。言語が多様なアジア諸国こそ共通語エスペラントの必要性が高いのである。

今、KAEMの委員長は韓国人 LEE Jung-kee 氏である。氏の精力的な活動で、KAEMの会合は活発であった。若者達もかなり多く世界大会に参加しており、韓国の運動も次第に層が厚くなっている。みやげ物販売コーナーには皆がたむろしていた。中国は伝統的にエスペラントの地位が高い。放送もあり、文化的蓄積もある。普及度は昔ほどではないにしても、まだ学校などで外国語の一環として教える所も残っている。今回 Wang Ruixiang 氏他多くの中国人たちとも交流でき、これからの関係の発展が楽しみである。ネパール代表の女性はとても流暢にエスペラント語をあやつっていた。堀泰雄さんの刺激もあつてのことである。ヴェトナム代表はポーランドでエスペラント語を学んだようである。ホーチミン自身がエスペランティストであったこともあり、ヴェトナムでの普及は今後も大いに期待できる。インド人にとってエスペラント語はアジアの中では最も母国語に近いので非常に上手である。

これらアジア諸国のエスペランティストが仲良く普及活動を継続していけば、アジア諸国の友好はもとより、世界のエスペラント運動に大きな刺激を与えることであろう。例えば、日中韓越極東アジア経済圏との貿易にエスペラント語が役だつ時代が来る、というのは決して達成不可能な夢ではない。各地に派遣される社員とその家族たちがエスペラントを学習し、現地のエスペランティストと交流出来れば、外国駐在も快樂となろう。アジアとの交流においてエスペラントが有効であるという実績を積み重ねていけば、その他の地域も自ずとエスペラントへの関心が高まるはずである。

日本の課題

最後に日本の役割と課題について述べておこう。世界大会において日本人でめだつた活躍をした人は堀泰雄氏である。氏は珍しい楽器の紹介と田島万祐子氏との演奏で聴衆を沸かせた。UEAの委員として、難壇の上で立派に役割を果たした。さらに、アジア諸国の会議KAEMでも中心的な発言者であった。このような人物がいることに我々は誇りに思う。また京都の藤本夫妻も世界大会改善のためのアンケート調査を行われていた。しかしながら、まだまだ多くの分野で日本人は発言していかなければならない。今回のオランダで痛感したことは、欧州と日本のエスペランティスト達の置かれた状況の相違である。

日本人はやはり不言実行である。雄弁ではない。しかし、自分の立場でエスペラントのために可能な限り行動している。大きな理想、計画、事業などは語らないが、小さな活動を着実に継続している。私は今回沢山の会議に出席する中で、印欧語圏の人々の雄弁さに羨望の念をもつ反面、実践面での物足りなさを感じた。多くを語るが、肝心の行動は既存の制度の枠内でしか実行できていない。また最後には「資金不足」を理由にする。その一つの例が、ロッテルダムである。エスペラントの世界大会がこの市民にどれほど宣伝されたのであろうか？市民はほとんど知らなかったに違いない。まず自らの足元から着手しなければならぬ。

印欧語圏の人々にとってエスペラントは母国語と同様に習得可能な言語であり、その点で我々極東アジア人はハンデを負っている。日本人で、討論に加わり相手を論駁する力のある人は稀である。しかしなが

ら、日本人エスペランチストは手弁当で善意によって日本の運動を支え、さらには世界の運動に物質的な寄与をしている。各種奨励賞を日本人の名の下に出しているのを見れば、そのことが納得できよう。日本人エスペランチストの多くは現在決して裕福ではない、しかし世界大会には多くの参加者があり、自分の立場で出来る限り可能なことを実行している。今回の世界大会で僕は日本のエスペランチスト達に好感をもち尊敬の念を深くした。

ただし、まだまだなすべきことは多い。日本人は自国の優れた古典をできるだけ多くエスペラント語化しなければならない。万葉、古今、源氏物語、和漢朗詠集、方丈記、徒然草、芭蕉、蕪村、一茶、などなどはより完全な形でエスペラントに翻訳され、エスペラントを学ばなければ日本文学研究は不可能、と言われる程度まで質の向上をはからねばならない。横浜大会について、栗栖継氏が源氏物語の翻訳の重要性を論じたが、まさにその通りである。日本語教科書ももっとエスペラント語で書かれ、日本語学習者の必読書になる程の教科書にする必要がある。つまり、日本研究の基礎を日本人エスペランチストが築いていく。このために現在活躍中のエスペランチスト達の力を結集すると同時に、国語・国文学研究の学徒たちの間にもエスペラントを普及せねばならない。

囲碁分科会で。右側で打っているのが佐々木さん

おわりに

欧州エスペランチスト達の目前の課題は、EUの共通言語化であるはずである。しかし、今回の大会でそのことが大きく議論されたであろうか？ 私の出席した会議ではほとんど話題に出なかった。ロッテルダム市民にすら宣伝できないのに、EUなどとんでもない、と思うのではなかろうか。誰しもエスペラント語がEUの共通言語の一つになって欲しいと思う。しかし欧州のエスペランチスト達はそのことを議論したがない。もし議論すればその夢が壊れる、と恐れ「禁句」であるかのようなようである。理屈ではエスペラント語が共通語として最適であるけれども、実践においてはその実現を阻む偏見の壁がまだ大きく立ちだかっている。彼らの想いは、もし共通言語に採用されればこの上ない幸運、ただそれを夢想するエスペランチストは現状無視のロマンチスト、とみなすという程度であろう。もしかすると、今すぐEUの共通言語となったらその課題を果たせるエスペランチストの人材が不足しているのかもしれない。

理論上「良い」ものが世間で直ちに受け容れられるものではない。逆に弾圧に会う方が歴史の多くの例である。エスペラントに出会うことが出来た諸個人は、自分の土壌で自分の可能な作物を植えていく。それは個人にとっては喜びであり、豊穡な人生の道である。エスペラントにとってはそれが現在流布の最も確実な方法である。そして、時が来たら直ちにその要求課題を果たせるような人材を数多く育成しておく。関東でも、日本でも、アジアでも、世界でも、そのことが現在エスペランチストの任務であろう。歴史進歩において好機は必ず来る、その好機を利用できるような人材を育成しておかねばならない。